



[令和元年9月11日 定例会発表要旨]

手稲鉱山の変遷

手稲郷土史研究会 会員 林 俊一

手稲の歴史を語るうえで、金が採れたヤマ「手稲鉱山」は、欠くことのできないものです。東洋一とうたわれた選鉱場を擁し、昭和の最盛期には鉱山関係者が町の人口の半数を占めたとも言われています。廃墟となった選鉱場は数年前までは国道からも望め、当時の活気を偲ぶことができました。跡地では、閉山後も鉱害防止のための業務が続けられています。

「手稲鉱山」の歴史と現況について、簡単ですが纏めてみました。

1. 位置・地形

札幌市の中心部から、北西約 12km。所在地は札幌市手稲区手稲金山で、手稲山（標高 1,023.7m）の北斜面中腹に「星置通洞坑口」が位置しています。

2. 鉱山の経歴

「手稲鉱山」のおもな沿革は、以下の通りです。

- 明治 26 年 烏谷部弥平治により、滝の沢上流付近で探鉱が開始される。
- 昭和 3 年 広瀬省三郎が、黄金沢、万能沢付近で金銀の優良鉱脈を発見する。
- 昭和 10 年 三菱鉱業株式会社（現 三菱マテリアル株式会社）が広瀬より鉱業権を取得する。



旧手稲鉱山 選鉱場（平成 26 年 10 月撮影）



旧手稲鉱山 選鉱場（平成 27 年 8 月撮影）

- 昭和 13 年 星置通洞坑を開削し、選鉱場建設。本格的な生産を開始。
- 昭和 15 年～17 年頃 年間採掘粗鉱量＝65 万 t。金＝1.8 t、銀＝25 t、銅＝800 t を産出する。鉱山の最盛期を迎える。
- 昭和 18 年 金山整備令により銅鉱山に転換し、戦後、急激に生産量が減少。
- 昭和 29 年 荒川鉱業株式会社へ鉱業権を譲渡。
- 昭和 32 年 千歳鉱山株式会社へ鉱業権を譲渡。
- 昭和 46 年 閉山。
- 昭和 51 年 全鉱区の鉱業権を放棄する。
- 平成 9 年 千歳鉱山株式会社から下川鉱業株式会社へ鉱業権譲渡。坑水処理の業務にあたる。
- 平成 18 年 下川鉱業株式会社はエコマネジメント株式会社に変更する。
- 平成 18 年 5 月、鉱害防止施設更新工事（排水斜坑、新水処理施設等）に着手する。
- 平成 20 年 12 月、新施設運転開始。現在に至る。





滝の沢斜坑（導水トンネル）



五番坑道 導水設備



滝の沢処理施設全景

3. 鉱山の坑水処理業務

昭和61年、星置通洞坑から異常出水し、下方域に浸水・冠水等の被害が出たことにより、鉱害防止が急務となりました。

それまで星置通洞坑や坑外に設置していた坑内水処理施設の老朽化が進んだため、平成18年度から20年度にかけて、滝の沢川上流地区に、坑内水の排出坑道（斜坑導水トンネル）ならびに、その処理に関わるシステムおよび施設設備を更新し、管理を強化しました。平成20年12月からは、滝の沢川新処理施設にて坑内水処理業務を行い、宮町浄水場下流の稲穂川に放流しています（濁川→新川→日本海）。いずれも、自然環境や生活環境に充分配慮したシステムとなっています。

現在、エコマネジメント株式会社の事業所従業員は、社員6名。昼勤のみで対応しています。

4. 鉱山の鉱物

「手稻鉱山」では、金、銀、銅、亜鉛、硫黄などのほか、テルル鉱や輝倉鉛鉱といった稀少金属と呼ばれる鉱物も見られました。なかでも手稻石は貴重なものとされます。

これらの鉱物標本は、山の手博物館（西区山の手7条8丁目 ☎011-623-3321）に展示されているほか、手稻記念館（西区西町南21丁目 ☎011-661-1017）でもいくつか見ることができます。また手稻西小学校「鉱山の部屋」では、鉱山の採掘現場を再現した展示をはじめ、当時の写真なども公開されています（手稻区金山3条2丁目 ☎011-681-2853 要事前予約）。一度、足を運んでみてはいかがでしょうか。

遺構・遺物は語る

鉱滓池の土手

大木が茂るこの傾斜地は、いったい何なのか。高さ4~5mほどもあろうか。

実は、手稻鉱山の鉱滓池を覆っていた土手なのだ。池は、鉱山から出る廃液や滓などを溜めて置くもので、3か所にわたって造成された。土手がくっきりと残っているところは、星置公園（星置2条1丁目）と手稻軽工業団地（曙5条5丁目）の2か所。もう1か所の札幌運転免許試験場（曙5条4丁目）のところでは一部しか残っていない。

池の大きさは1区画が26,000坪で深さ3mに達したというから、かなり大きくて深いものだった。造られた時期は明確ではないが、昭和10（1935）年以降に鉱山経営に本格的に乗り出してきた三菱鉱業が、当時この辺りにあった「曲長^{かねちやう}本間農場」の土地を買い上げて造成したと言われている。重機がまだ十分、普及されていない時期だけに大変な苦勞の果てに掘りあげられたに違いない。

廃液は、鉱山の選鉱場から国道、函館本線をそれぞれ横切ってパイプで運ばれていた。当初はこうした鉱滓池を10か所も造る予定だったと言われるが、最終的に現在、残っている3か所だけとなった。

村元健治（手稻郷土史研究会 会員）



星置公園に遺る鉱滓池の土手



崖にかかるフゴッペ洞窟の覆屋

9月21日（土）、手稲郷土史研究会主催の『日帰り視察研修ツアー』が行われ、会員ほか計40名が参加しました。雲ひとつない爽やかな朝8時30分、手稲区民センター前から大型バスに乗り込んだ一行は、手渡された研修資料に目を通しながら、ツアー責任者の沖田紘昭研究部長の先導で、一路、目的地の余市町『フゴッペ洞窟』を目指します。案内人を引き受けてくださったのは、小樽市在住の竹田輝雄さん。道内考古学研究の第一人者であり、小樽市博物館にも勤務経験をもつ専門家です。高校教師、北大理学部講師等を経て埋蔵文化財の専門指導者として活躍され、現在は日本考古学協会顧問の職に在ります。参加者は道中、竹田さんの聡明な解説に引き込まれてい

きました。以下、当日の行程を紙上で追ってみましょう。

【フゴッペ洞窟】 昭和25年に発見され、昭和28年に「国指定史跡」となりました。7,000～5,500年前の縄文海進による波の浸食でえぐられた洞窟に、2,000～1,500年前の古代人が描いたという人物像や動物など800もの刻画が遺されています。その時代の壁画は日本では二つしかないとの説明に、「こんな身近なところに今立っているのか」と、ビックリ!! そして残るもう一つがこれから行く小樽市の『手宮洞窟』と聞き、またまたビックリ! いずれも、壁面に原始絵画様陰刻を施した「続縄文時代」の大変貴重な遺産と知りました。なお、洞窟の近くを走る函館本線に「古代文字踏切」を見つけた参加者からは、「文字でなかったことが解明されて久しいのに こんなところに名残が…ロマンですね」とのオマケ情報もありました。

【忍路海岸】 幅200m、約900m 湾入の海食崖の発達した半島にある忍路海岸は、『ニセコ積丹小樽海岸国定公園』の一部です。かつてニシン漁で栄えた地であり、大正時代に建てられた北大の臨海実験所も健在です。ここで、一同が注目したのは、海底から次々と噴き出した溶岩が海水で冷やされて固まったという「枕状溶岩^{まくらじょう}」。まるで菊の花のような珍しい形の岩石に釘付けとなりました。

【忍路環状列石】 三笠山の麓にあるストーンサークル『忍路環状列石』は約3,500年前の縄文時代後期の遺跡で、長径33m、短径22mの楕円形の中に大小の石が並んでいます。道内で発見された類似の遺跡の中では最も雄大な規模。北方古文化の考察上重要な意味を持つと言われ、国の史跡にも指定されました。近接する『忍路土場遺跡』からは、古代人の生活具も数多く発掘されているそうです。環状列石に用いられた石は、約10km離れた余市町のシリバ岬一帯に露出する輝石安山岩が運ばれたのではないかという説も…。さて、どうやって?



竹田輝雄さんによるフゴッペ洞窟の解説



海中噴火のようすがうかがえる忍路海岸



謎に満ちた(?)忍路環状列石



手宮公園の「尼港殉難者追悼碑」



総合博物館運河館で
タイムスリップ？



小樽図書館で
希少写真と対面

【手宮公園】 頂上付近の「^{にこう}尼港殉難者追悼碑」を見学。大正9年にシベリアで多くの日本人が虐殺された 尼港事件は、実は手稲の歴史とも関わりがあります。事件の復讐と称してサハリン沿岸を荒らした海賊の頭 ^{えづれりきいちろう}江連力一郎が、温泉旅館「光風館」（現在の富丘6-3 付近）に潜んでいたところを発見され、大正12年、軽川駅前で逮捕されたのです。

【手宮洞窟】 当研究会の会員世代(?)には、「手宮の古代文字」の名前のほうが馴染みがあるでしょうか。小樽港に面した崖裾にできた、凝灰岩の海侵洞窟です。前庭の海岸は埋め立てられ、上部崖地は開削され、降下栈橋に通じる鉄道が敷設された環境で、大正10年には国の史跡に指定されています。慶応年間に発見され、明治10年代には世に知られることとなりました。この洞窟の刻画が描かれた時代は、今からおおよそ1,600年前の縄文時代中期～後期といわれ、本州の弥生時代の終わり頃から古墳時代の初めの時期にあたります。はたして何を表現したものは未だ謎に包まれているようですが、古代の人々の心を知る上でとても大切な第一級の遺跡といえるものです。

【長橋なえぼ公園】 『長橋なえぼ公園』は400種類以上の植物を擁する「自然生態観察公園」です。前身は明治26年開設の「^{おたるびょうほ}小樽苗圃」で、手稲山の植林に寄与した「北海道造林合資会社」のお手本と伝わります。小樽近郊の国有林に植林事業のために苗木を供給すると共に、その敷地内に見本として植えた苗木が、現在 見事に森林へと成長しています。研究部が用意した寿司弁当をいただいた後、公園の指導員 山本謙也さんを講師に、スライド学習と観察会を楽しみました。ちなみに、園名の「なえぼ」は、明治時代、『小樽新聞』が「苗圃」のルビを誤って振ったことによるそうです。

【小樽市総合博物館運河館】 明治26年に建てられた石造の「旧小樽倉庫」を再利用した運河館へ。開催中の企画展「星コレクションー北鉄路の記憶・昭和編ー」をはじめ 商都として栄えた小樽の歴史に触れました。お隣の『運河プラザ』では、コーヒープレイクや土産品の購入も…。

【小樽図書館】 大正5年に区立小樽図書館として開設し、公立図書館では道内で枝幸町に次いで二番目に古いという歴史ある図書館。平成28年には創立100年を迎えています。館長の鈴木浩一さんのご案内で、「郷土資料室」のバックヤードなどを見学させていただきました。見たこともない幕末から現代にいたるまでの貴重な史料や書籍が整然と保管されており、「もう鍵を掛けますよ」に「閉じ込められたい」と言い出す参加者もいたほど。図書館の蔵書は30万冊を超え、貸し出し数は年間38万冊、来館者は20万人といます。鈴木館長は「資金不足で十分な管理とはいえないが、これからも市民に親しまれる図書館を目指します」と、力説しておられました。

【そして帰路…】 図書館を後にして『新南樽市場』で買物タイム。参加者40人は疲れも見せず、予定の午後5時半、手稲区民センターに到着。企画された沖田研究部長はじめお世話くださった研究部の皆さんに感謝しながら、再会を誓い解散！ 長時間大変お疲れ様でした。

佐々木光男（手稲郷土史研究会 会員）



長橋なえぼ公園にて記念撮影！

次回定例会 ⇒ 発表内容「手稲山の生い立ち」 / 松田義章氏（北海道総合地質学研究センター 理事） / 11月13日（水）18:15～ / 手稲区民センター3階 視聴覚室 / 当研究会の会員でない方の聴講も可